

第20回ヤンマー学生懸賞作文 銀賞

酪農の問題点

45期生 常松 歩

今日の酪農だけでなく、農業界全体の数ある問題のなかに、最も耳に入る問題として、後継者不足というものがある。何故これほどまでに、この問題が世間を賑わすのだろうか。

私は、幼い頃から、動物が好きだった。小学生だった頃は、学校帰りに昆虫等を見つけては持って帰り、飼育したりしていた。そんな数ある動物の中でも、今現在専門的に勉強している牛は、格別な存在であった。近所の和牛農家にお邪魔し、給餌をしたり、除糞をしたりさせてもらった。このように、私にとって農業、畜産というものは、幼い頃から、農家の家ほどではないが、身近な存在であった。「牛を飼いたい」と言い出し両親を困らせたこともあった気がする。

そういったこともあった経緯から、中学校を卒業したら、農業高校に進むということはかなり前から決めていたことだった。そして、農業高校に入学したからには、農業関係の職に就くのが当然であると思っていた。しかし、現実がちがった。私の同級生で、農業関係の職場・学校に就職・進学した者は、片手で数える程であった。何故、皆高校で学んだことを活かそうとしないのかと、不思議に思ったこともあったが、最近になって2つの真相が分かった。この2つの真相を、誤解を承知で言わせて頂くと、1つは、今の農業界は、非常に狭き門だ、ということ。といっても、教員採用試験のように少ない椅子を大人数で争うわけではない。もともと椅子も準備されていないし、その椅子に座ろうという者もごく僅かであるのではないか。現に求人票を見ても、農業関係からは来ていなかった。そして、私の同級生に聞いても、農業関係の職場・学校に就職・進学すると言った者は、ほとんどいなかった。何故、このような事態が起こってしまったのか。まだ青いなりに考えた結果、2つ目の真相が浮かんた。それは、今と昔とで、農業というものの捉え方が変わった、ということではないか。具体的に言うと、聞いた話だが、昔は農業というものは、絶対的な存在であった。田畑を耕し、少なくとも自分たちが食べるものは、自分たちで作っ

ていた。しかし、いつ頃からか輸入されて来た海外製品に押され、日本産のものは高価で売れず、衰退しつつある。その結果、途中で放棄された田畑、牛舎が辺りにあふれ返りつつある。そして、日本人が一生懸命頑張り、努力しなくても、安価な海外製品が食卓を彩るようになり、日本国内の農業というものは、農業従事者でない人々からすれば、恐らくもう必要がなく、なんの魅力もないのかもしれない。従って、最近の若い人たちも、様々な娯楽の出現、職業の多様化なども手伝い、後継者不足が、農業界全体の問題になってしまったのではないか。

また、私の体験談になるが、私も当初は、高校を卒業したら、すぐに牧場へ就職するつもりであった。しかし、前述の通り、牧場からは求人票はきていなかった。「牧場で働く」ということに強いこだわりを持っていた私は、たまたまインターネットで、大きな牧場を見つけた。その牧場は、良質な牛乳を生産しており、10年以上連続で表彰され続けている、大変優秀な牧場であった。すぐに進路の先生へ掛け合い、従業員を募集していると記述があった旨を告げ、求人票を出して頂くよう頼んだ。今思えば、かなり無謀なことをしたと思う。返ってきた答えは、とりあえず一度うちの牧場で実習をしてみなさいということだった。そして、夏休みを利用し、1週間弱お邪魔させて頂いた。何度か、農家で働いたことはあったが、ここまで大きな牧場で実習をしたことは初めてで、ただ圧倒されるばかりであった。朝4時から、6時間搾乳など、大変なことばかりであったが、とても充実した、有意義な実習になった。しかし、実際の現場に立つと、私はなんとも無力な存在であった。高校では、手作業で行う給餌・除糞もローダ・ダンプなどを用い行っていたため、年齢的にも免許を持っていなかった私は、何もすることが出来ず、プライドを壊されたような感覚を覚えた。今まで高校でやってきたことは、いったいなんだったのか。役にたったとは、とてもではないが言えなかった。

そして、実習が終わったとき、経営者・従業員の方々から、「本当によく働いた」と、更に「求人票を出す」とまで言って頂けた。恐らく、実習へ行く前の私なら、飛び上がって喜んでいただろう。実習後は複雑な心境だった。何故なら、前述の通り、もしこのままこの牧場で働いたら、全く通用しないことは、目に見えていた。

両親、先生とも相談した結果、高校卒業後は、蒜山の財団法人中国四国酪農
大学校へ進学し、酪農で働くのに必要な免許・技術・知識等を修得することに
決めた。そのことを、実習をさせて頂いた牧場の方にも告げると、良い選択で
あると思うという言葉を受けた。

決して自分の行動を誇示するわけではないが、ここまでしないと、なかなか
農業という椅子を得るのは難しい現状がある、ということを感じた。一般企業
と違い、内申書や面接だけでは、採用するか否か、判断しがたいのではないかと。
実際の現場に立たせ、動きを見ることが、何よりの採用試験となる。しかし、
その採用試験中に、何人もの“受験生”が挫折してしまうということを知った。
これも大きな問題であると思う。これは、“受験生”側の問題であろうが、これ
によって農家は、“受験生不信”に陥り、求人票という椅子を出し渋り、門を閉
ざしてしまう。そして受験生たちも、門が閉ざされたことと、前述の通り採用
試験を途中で辞めてしまうほどきつい、という現実を受け入れ、結果そこには、
「負の連鎖」が生まれてしまい、それが今日まで続いているのではないかと。

また、農家は、「よそ者を受け入れたがらない」という話も聞いたことがある。
私のように、「この牧場で働きたい」と思っても、門前払いのような感じで、全
く取り合ってもらえなかったらしい。つまり、自分たちがここまで作り上げた
牛舎を、何故赤の他人同然の若僧に提供しなければならないのか、といった心
境だろうか。それは、農家としても、どんなに厳しい時代も、農業を守ってき
た、というプライドを当然お持ちだろう。

しかし、過去ではなく、今現在の後継者不足という大きな問題に、どうか目
を向けて頂きたい。そして、農業界の将来を担う我々若者、私のような非農家
の若者に、少しでもチャンスを作って頂きたい。恐らく、前述のような農家は
少ないと思うので、新規就農を目指す人たちに力を貸して下さる方も増えて
いってほしい。

ここまで農家に全て責任があるかのように書いたが、決してそんなことはな
い。共進会等で会う農家の方々は皆優しく、様々なことを教えて下さる。アル
バイト先の農家の方もいつも笑顔で指導して頂いた。また、酪農ヘルパー専門
技術員養成研修でお世話になった農家も、厳しかったがとても楽しく実習をす
ることができ、また、普段の作業でも、より牛に優しく、丁寧に取り組めるよ

うになった。

何人かの人に、「牛飼いの良い時代はもう終わった。」「新規の人間が行く世界じゃない。」など、なかなか厳しいことも言われた。たしかにその通りだと思う。私は、非農家で、酪農家の本当の苦労などのしっかりと分かっていないだろう。新規就農にどれだけの莫大な資金が必要かも、人づて・資料でしか知らない。しかし、今のこの後継者不足という問題は、こんな無知な私にも分かる。それほど深刻な問題だと思う。こんな時代だからという訳ではないが、酪農家を志す者として、この問題としっかりと向き合い、日本の酪農・農業に少しでも貢献していきたい。そのためにこの蒜山という地で必要な知識・技術等を身に付け、一人前の酪農家になりたい。

最後に、今の夢は、無事中国四国酪農大学校を卒業し、人間として、酪農家として一人前になったら、お世話になった方々に恩返しをすることです。